

## 受難節第1主日礼拝説教「誘惑はどこから？」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年3月9日

### 【旧約聖書日課】申命記 30章15～20節

<sup>15</sup>見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。<sup>16</sup>わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。<sup>17</sup>もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、<sup>18</sup>わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはない。<sup>19</sup>わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、<sup>20</sup>あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

### 【使徒書日課】ヤコブの手紙 1章12～18節

<sup>12</sup>試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。<sup>13</sup>誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。<sup>14</sup>むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。<sup>15</sup>そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

<sup>16</sup>わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。<sup>17</sup>良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。<sup>18</sup>御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

### 【福音書日課】マタイによる福音書 4章1～11節

<sup>1</sup>さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。<sup>2</sup>そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。<sup>3</sup>すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」<sup>4</sup>イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』」

と書いてある。」<sup>5</sup>次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、<sup>6</sup>言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」

『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」<sup>7</sup>イエスは、

「『あなたの神である主を試してはならない』

とも書いてある」と言われた。<sup>8</sup>更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、<sup>9</sup>「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。<sup>10</sup>すると、イエスは言われた。「退け、サタン。」

『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」<sup>11</sup>そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

#### 四十日間の断食【こども説教のために】

教会は、先週水曜日から「受難節（レント）」の期節に入りました。主のご復活を祝う「復活祭（イースター）」の前、四十日間と六回の日曜日を、備えのときとして過ごします。主イエスが「神の子」としてのお働きを始められる前に四十日間、荒野で断食をされたように、わたしたちも、ご復活の主によって「神の子」としていただいていることを、四十日間、断食と祈りと愛の施しに励みながら、心に刻み直すのです。

聖霊に導かれて荒野に行かれた主イエスのもとには、**誘惑する者**が現れました。その者は、「**悪魔**」と呼ばれています。悪魔は、どんなにか悪いことを主イエスにさせようとしたのでしょうか。悪魔は、主イエスに、「**神の子なら…**」とささやいたのです。「**神の子なら、何でもできるのでしょうか**」、「**神の子なら、どんなことをしても神が助けてくださるのでしょうか**」と。

主イエスがわたしたちを「神の子」としてくださるのだとしたら、わたしたちは、どんな「神の子」になることを望むのでしょうか。

「神の子」としてお働きになる備えをなさっていた主イエスは、石をパンに変えることもできたかもしれませんが、そうなさいませんでした。それよりも、「神の子」として「神の言葉」をいただくことを大切になさいました。主イエスは、御父である神の愛が本物であることを試してみることもできたかもしれませんが、そうなさいませんでした。ただ、御父を信頼されました。

主イエスは、わたしたちも主イエスを做って「神の子」と呼ばれるのにふさわしい者になることを、願ってくださっているのです。

## 「神の子ならば」

一昨日の金曜日、石神井教会の第二代牧師でいらした齋藤友紀雄師の葬儀を、救世軍杉並小隊で執り行わせていただきました。齋藤師が半世紀前、石神井教会の牧師を退かれてから働き場として来られた「いのちの電話」などの関係者が大勢、参列くださっていたようです。式場となった救世軍杉並小隊は、齋藤師が晩年、日曜礼拝に出席されていた教会です。けれども、葬儀を執り行うための奉仕の多くは、石神井教会にお委ねくださいました。皆さんの中から多くの奉仕者と参列者が、式場に駆けつけてくださいました。想定外に時間が延びてしまいましたが、多くの方の思いが寄せられた葬送の式とされたことは幸いでした。

私事ですが、この度の葬儀に際して、わたしは多くの救世軍関係の方からお声をお掛けいただきました。20年ほど前、わたしの父が救世軍の経営する病院の一つに医師として働き場を与えられていたのです。また、同じく医師の兄も、同じ病院で10年ほど前、働かせていただいていた。父や兄と同僚として働いていたという方々が、わざわざご挨拶くださったのです。過去の人間のことを憶えてくださる方があることを、素直にありがたく思いました。まだ若かった頃には、そのようなときに、どこか警戒してしまいがちでした。わたしの内心で複雑な思いが沸き起こっていたからです。「父の子」と呼ばれ、「兄の弟」と認識されることに対して、どこか所在ない思いが生じていたのです。「父の子」であること、「兄の弟」であることを、勝手に意識し過ぎていたのでしょう。

わたしたちは、主イエスを「神の子」とお呼びします。ところが、主イエスは、わたしたちにも、ご自分と同じような「神の子」になるようにとおっしゃいます。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ 5:48)とおっしゃられ、あなたがたの父に「こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ』」(同 6:9)とお教えになられたのです。

「天の父の子として生きるように」、「わたしの兄弟として歩むように」と、主イエスは、わたしたちにおっしゃるのです。何と面映ゆいことでしょうか。もちろん、それは光栄なことなのです。けれども、わたしたちは皆、どこか居心地が悪いのです。「自分は、天の父の子としてふさわしいだろうか」、「主イエスの兄弟と自信をもって言えるだろうか」と。自分でもそう思っているのですから、他者から言われれば、なおさらです。「あなたは天の父の子なのでしょう」、「あなたは主イエスの弟子、主イエスの弟分、妹分なのでしょう」。そう言われて、自分がそれにふさわしく振舞えていないことを恥ずかしく思ったことが、どれほどあったことでしょうか。

## 誘惑する者

けれども、それもわたしたちには必要なことなのでしょう。「あなたは神の子なのでしょう」と言われ、「あなたは主イエスの弟子なのでしょう」と問われ、その問いに向き合うことが、わたしたちには必要なのです。

他にもない主イエスが、荒れ野の四十日の断食を通して、「あなたは神の子なのでしょう」と問いかける声と向き合われていらしたのです。

それは、「**誘惑する者**」の声でした。「**悪魔**」と呼ばれています。どこからやって来たのでしょうか。「サタン」は、旧約聖書では、神が遣わされる御使いの一種です。悪魔も、神から遣わされてきたのでしょうか。「ヤコブの手紙」を記したヤコブは、誘惑がその人自身の中から、欲望から発せられていると言います。悪魔は、わたしたち自身の中にある存在、わたしたち自身の一部なのでしょう。

主イエスは、「あなたは神の子なのでしょう」と問う声の主が何者であるのかには関心がなかったのかもしれませんが、そのような問いに誘惑され、惑わされるご自身のあることに、目を向けられたのでしょうか。ご自分が神の子として何を為し得るか、ということではなく、神が何をお語りくださっているか、神が何を御与えくださっているか、ということに集中なされたのです。そのような心の経験を荒れ野でされたのです。

この四十日の経験を、主イエスは弟子たちにお語りくださったのでしょうか。弟子たちは、主イエスがお働きを始められ、自分たちを従わせるようになれる前に経験されたこの荒れ野の出来事を、心に留めました。主イエスに従う者として、まず第一に心に留める出来事として教えてきました。主イエスの歩まれた道の初めの出来事を、自分たちの主に従いゆく道の初めに置いたのです。主イエスのご経験を、自分たちも経験するためです。後に続くすべての者が、同じように経験するためです。

誘惑する者は、どこからともなくやってくるでしょう。いつでも、繰り返して、近づいてくるでしょう。その者の声は、どこか優しく誘いかけてくるのです、「あなたは神の子なのだから」と。

そう、わたしたちは「神の子」とされるのです。主イエスが、そのような道を拓いてくださいました。けれども、「神の子」と呼ばれることに、心惑わされるのはおしまいにしましょう。神の子として、わたしたちは、御父の御言葉を聞き、御声の響きを聞き取るのです。御父は、何であろうとお助けくださるでしょうが、わたしたちは、その御力を確かめる必要はありません。ただ、信頼するのです。「神の子」として、「天の父」を信頼するのです。「天の父」が「神の子」らに与え、備わらせてくださったものがあることに信頼するのです。わたしたちは、すでに「神の子」なのです。